

「過去」と「未来」をつなぐ、 「今・ここ」のわたしたちの平和教育

1. はじめに
2. 「過去」の事実Ⅰ～広島・長崎～
3. 「過去」の事実Ⅱ～沖縄戦の被害性と加害性～
4. 尾鷲の戦争～「えっ、こんな田舎でも!？」～
5. 「未来」へつなぐため、
「今・ここ」のわたしたちにできること
6. おわりに

三重県教職員組合

平尾 一真 (ヒラオ カズマ)

尾鷲市立尾鷲小学校

今次教研で論じられた内容と今後の課題

今次三重県教研では、計6本の報告書で3つの柱に沿って討議がおこなわれた。討議の内容や助言・課題も含め、以下にまとめる。

(1) 文学教材を起点とした平和教育

伊賀名張支部からは、第五学年国語科「たずねびと」(光村図書)の学習から平和学習へと展開した実践が報告された。たずねびとの学習を通して、「戦争が起こったこと、広島に原子爆弾が落とされたこと」を知り、そこから「戦争がおこったきっかけを知る」「戦争中のようすを調べ、まとめる」「調べたことを発表し、平和について考えをまとめる」というように平和学習をすすめる、戦争への理解を深めたり、関心を高めたりすることに繋がったという報告であった。

津支部からは、第五学年国語科「たずねびと」(光村図書)の学習から、戦争と四日市公害の共通点を感じとったという子どもの発言もとりあげながら、戦争と四日市公害の問題解決にとりくみつづけた人から学ぶという学習をおこなったという報告がされた。「たずねびと」の学習から、戦争が最大の人権問題であることにつなげ、平和について考えていく活動をおこなった後、戦争と四日市公害の問題の共通点を講師から教えていただきながら学習をすすめたという報告であった。

討論では、文学教材からどのように平和教育につなげていくか、文学教材のよさなどが議論された。文学教材は、子どもたちが自分との共通点を見つけ物語に入ることによって自分事のできることで、写真や映像だと恐怖から学習への抵抗を感じるが、文学教材は抵抗感少なく学習に臨むことができることがよさではないかという意見があげられた。また、文学教材を起点とし、地域の話題につなげることで平和について考えさせることに繋がるのではないかという意見も出された。

(2) 地域や語り部から学ぶ平和教育

鈴鹿亀山支部の小学校からは、市の班研修における平和教育のとりくみと授業実践が報告された。平和教育班としての活動は、地域の戦争遺跡のフィールドワークをおこない、それをポータルサイトにまとめていること、実践交流がおこなわれているということであった。実践は2つ紹介され、ひとつは、「たずねびとから広島のおりづるの話につなげ、平和への一步を考えさせる」というもの、もうひとつは、「クラスの人権課題を、鈴鹿市の戦争・日本の戦争の歴史を学ぶ平和学習を通して考えさせる」というものであった。

東紀州支部からは、6年生におこなった「総合的な学習の時間」における平和教育の1年間の実践が報告された。子どもたちが「何を見て何を考え、何を行動に起こせるのか、子どもたち自身の言葉で語るができること」を目標に、修学旅行で立命館大学国際平和ミュージアムへ訪問したことからはじまり、広島・長崎の学習、沖縄戦の学習、尾鷲の戦争の学習や出会い学習とつなげ、「今・ここ」のわたしたちにできることを考えさせたり、発信させたりしたという報告であった。

鈴鹿亀山支部の中学校からは、報告者自身のヒロシマ平和行動の体験を伝えること、被爆者の体験の動画視聴、被爆体験記朗読会をおこなうことで、3年時の修学旅行での平和学習につ

なげていくという実践が報告された。朗読会で、語り部たちの話を聞くなかで、「原爆だけでなく普段の生活から相手の気持ちによりそって、人を傷つけずにみんなが幸せになれるように心がけて動きたいと思った」「『平和の原点は人間の痛みがわかることだ』といった言葉が胸に刺さった」などの感想をもつ生徒がいたという報告もあった。

討論では、地域の方や語り部の方とどうつないでいるかや、加害の学習について議論された。つながる方法は、人づてであったり通信等で発信したりと多様であるが、行動することにつながるといふこと、つながった人の記録を残していくことが大切だといふ話があがった。また、加害の学習は、被害の学習よりあつかわれなことが多いが、教員側が意図的に学習の機会をつくっていくことも必要だといふ話もあがった。

(3) 社会科の授業を通じた平和教育

三泗支部の中学校からは、社会科の授業を通して、よき有権者の育成をめざすという実践が報告された。公民的分野では平和や安全保障のことを考え、歴史的分野では為政者の評価をおこなう活動を中心に授業をすすめていたという報告であった。「なぜ若者は選挙に行かないのか、どうすれば選挙に行くようになるか」と考える活動など、子どもたちが将来のよき有権者になれるようにとりくんだ実践の報告であった。

討論では、批判的に考えることの大切さが話題になった。平和教育に限らず、物事の一面だけで情報をうのみにするのではなく、批判的に考えることが大切で、自分で事実かどうか確かめていくことで、平和に対する考えも深めていけるのではないかといふような話があがった。

成果と今後の課題

一日を通して討論では、どのように平和教育をすすめていくかということが議論された。文学教材を起点とするもの、地域や語り部から学ぶもの、社会科から学ぶものという討議の柱もそうだが、学校教育という限られた時間のなかでは、教科とつなげていくことが大切だとあらためて確認された。助言者からは、加害の視点も大切にしていふことや、日常の平和といふ人権保障を大切にすること、子どもが身近に感じるようにすること、教員としての姿勢も含め確認された。

1. はじめに

本レポートは、昨年度6年生でおこなった「総合的な学習の時間」における「平和教育」の1年間の実践報告である。尾鷲小学校に初任で赴任し3年め。6年生の担任と告げられたときに思い浮かんだのは「平和教育」であった。自分につとまるだろうか、どうすれば子どもたちが「平和」について自ら考え、学びつづけることができるだろうか、そもそも「平和」とはなにかと多くのことに不安を覚えていたことを思い出す。戦後79年をむかえ、戦争経験者の語り部が少なくなってきたなかで、「今・ここ」にいきるわたしたちが、そして「未来」を創造していく子どもたちが何を見て、何を考え、何を行動に起こせるのか、子どもたち自身の言葉で語ることができるようになることを目標に学習をすすめていこうと考えた。

6月、修学旅行で立命館大学国際平和ミュージアムを訪れた。1年間平和について学んでいくのならと行程に組みこんだが、展示は「帝国日本の植民地・占領地」や「十五年戦争」など、内容・記述ともかなりむずかしく、「子どもたちにわかるだろうか」「戦争や平和を学んでいく意欲の低下につながるだろうか」と一抹の不安を抱えていた。しかし、そんな心配は当日のようすを見てふきとんだ。真剣なまなざしで展示やパネルを見て、メモをとるようす。学芸員の方にわからないことを自ら質問をする姿。「先生、メモするところ埋まってっただで新しい紙ちょうだい」と時間ギリギリまでとりくむようすがみられた。「この子たちは本気で学ぼうとしている。その思いをなくさないよう、たくさんのことを経験させたい」そう思わされた。「過去」の事実を学び、考え、平和な「未来」を創造するために、「今・ここ」のわたしたちができる平和教育をこの子たちと1年間、必死で頑張ろうと決意した。

2. 「過去」の事実Ⅰ ～広島・長崎～

国際平和ミュージアムを訪れてから1か月後、本格的に平和学習をはじめた。まず、子どもたちが今、「平和」とはどう考えているのかを問いかけた。多くの子どもたちは、戦争がないことと答えた。この「平和」とは何かを自分の言葉で語ることができるように学習をすすめていこうと思った。最初の大きな活動としておこなったのは、8月6日の広島、8月9日の長崎の忘れてはならない原子爆弾とその被害についての学習である。

「8月6日と9日って日本にとって忘れたらあかん日なんやけど、何か知っとる？」

と問いかけたところ、多くの子どもたちが

「広島と長崎に原爆が落とされた日やり」「たくさんの人が亡くなったんやろ」

と答えた。1年生のときから、夏休みの平和学習にとりくんできた子どもたちにとって、この日に何があったのか、当たり前知っている、そのようなようすだった。

「じゃあ、79年経った今もこうやってみんなが勉強するのはなんでなんやろ」

「二度と戦争しやんためやと思う」「忘れたらあかんからやり」

「なんで忘れたらあかんのやろ。実はこの日って世界にとっても大事な日なんさね」

「えっなんでなん」「アメリカとかはわかるけど、世界ってどういうことなん？」

こうした疑問を導入に調べ学習をおこなわせた。調べ学習をすすめるなかで①調べなければならないこと②調べたいこと③そこから自分が考えたことの3つの観点に分けるように声をかけた。①では、原子爆弾による被害・原子爆弾が投下されたことによるその後の被害・79年たった現状を調べるように伝えた。一生懸命に調べ学習をすすめる子どもたちからは「原爆投下の中心付近の人は、影しかのこらなんだんやって、、、」「爆風で叩きつけられて亡くなった人も

おるんや」「生き残ったけど、放射線で白血病とかになって亡くなっていった人もおるんや」と、次々と声があがってきた。

特に、原爆が巻き起こした惨状に驚いているようすだった。そして、世界で唯一の被爆国であること、79年たった今でも世代を超えて放射線の被害があることを子どもたちは学んだ。そして、学んだ「過去」の事実をもとに、ポスターを作製した。自分たちがはじめて知ったことをどう言葉に表せば、多くの人に伝わるのか、戦争は今もなお苦しみがつづいており、その事実を伝えていかなければならないと子どもたちは自分たちの言葉で表現することができた。

3. 過去の事実Ⅱ ～沖縄戦の被害性と加害性～

中学生のときに修学旅行で沖縄を訪れた。そのなかで印象に残っているのは「アブチラガマ」と「ひめゆりの塔ひめゆり平和祈念資料館」である。今なお残っていた異様なガマの空気感、ひめゆりの塔で見た残酷で醜悪な虐殺行為の数々に思わず視線をそらしたくなったのを思い出す。沖縄戦を子どもたちと学んでいくときに、大切にしようと思ったことがあった。それは、沖縄戦における日本の被害性と加害性、その両面性を伝えようということであった。9月下旬、沖縄戦の学習をはじめた。学習にはウェブサイトを活用した。沖縄戦と太平洋戦争についての動画や、体験者自身が描いた「沖縄戦の絵」などがあり、言葉だけでは語りきれぬ体験がつづられていた。学習はワークシートをもとに、個人が調べ学習をすすめるなかで感じた思いを記録していった。学習をすすめる前に沖縄戦の概要を話した。尾鷲から遠く離れているが、日本という国に住む以上知っておかなければならない出来事であること。しかし、あまりにも直視しがたい内容もなかにはあり、無理に見る必要はないことも伝えた。子どもたちは、母親が子どもを抱き、泣く姿や、もし自分がその場にいたらと当時の人々の気もちに共感することから、考えを深めることができた。

また、何よりも子どもたちが衝撃を受けていたのは、日本軍の行動である。

「実は、沖縄は日本で唯一の地上戦がおこなわれた場所なんさ。一体なんでなんやろ」

「ちっさいからじゃない。」「中国に近いからとか、？」

唯一の地上戦がおこなわれた沖縄が、本土決戦のための時間稼ぎとして使われたこと、「捨て石作戦」であったことを伝えた。

「そのためだけに？沖縄に住んどる人のこと考えてないやん」

壕の中のようなすや、集団自決の強要、虐殺、軍や兵隊は住民の命を守るものと思っていた子どもたちにとって、この加害性は衝撃が大きかったようであった。しかし、子どもたちは沖縄戦の事実からにげることはなかった。つらすぎる、こんなことがほんとうに起こっていたなんて、そう思い思いに言葉する子どもたちだったが、こんな声も聞こえてきた。

「つらい悲しいっていいよるけど、ほんとうのつらさは多分自分たちにはわからん」

「つらいし、見たくないけど、自分たちが学んで、伝えていかなあかん」

今まで、日本は被害を受けていただけだと思っていた子どもたちにとって、この学習は子どもたちの戦争や平和に対する見方を大きく変えたように感じた。

4. 尾鷲の戦争～「えっ、こんな田舎でも！？」～

小学校・中学校と自身も平和教育を受けてきた。そんななかで自分の家族に話を聞いてみようとという活動があった。学校の運動場でさつまいもをつくっていたことや、家の近くに共同の

防空壕があることを教えてもらった。子どものとき、海に兵隊さんの死体が流れてきて近くのお寺まで友だちと運んでいたという家族の話を聞いたとき、こんな田舎でそんなことほんとうにあったのかと当時の自分は思っていた。しかし、「尾鷲の戦争」を今になって学び、その「過去」の事実を知った。

「広島や長崎、そして沖縄戦など、こんなにつらいことが当時はいたるところで起こったんさ。それは、先生やみんなが住むこの尾鷲でもあったんやで」

「えっ！こんな田舎でも！？」

10月、尾鷲の戦争は主に『尾鷲にも戦争があった』と、フィールドワークで学習をすすめた。まずは『尾鷲にも戦争があった』から、尾鷲の戦時中のようなすやぐらしなどについて学んだ。以下は特に「駒橋への奇襲攻撃」についての学習記録である。概要は以下のとおりである。

太平洋戦争がはじまってから、尾鷲沖の熊野灘を通り、南の国にいく輸送船などの船がアメリカの潜水艦に沈められるようになった。そこで海軍は1942年に日本の船をアメリカの潜水艦から守るため「第26掃海隊（4隻）」をおいた。44年、軍は艦艇を増強し、「熊野灘部隊（9隻）」となった。担当区域は御前崎から潮岬の沿岸、その指揮艦が「駒橋」である。45年7月28日午前5時50分すぎ、12機の戦闘機が尾鷲に接近していることを発見。低空でまっすぐ尾鷲の空に飛行する。午前7時ごろ、アメリカのグラマン戦闘機6機のうち3機が尾鷲湾に、残りの3機が須賀利湾の艦艇に奇襲攻撃をしかける。戦闘は午後4時頃まで約30分間隔で波状攻撃を仕掛ける。駒橋はロケット弾3発・爆弾1発の直撃を受け大破し、水没を免れるために国市の浜に座礁。昼の12時前後にせぎ山下の海岸に着底する。戦死者、負傷者多数という事実を残した。

資料をもとに学習をすすめるなかでこんなにも激しく、死者や負傷者を出した戦闘が、今自分たちが遊び、何気なく過ごす、すぐ近くの海であったという事実に衝撃を受けていた。

「先生、ほんまにこんなこと尾鷲であったん？」

「一瞬で74人も亡くなったって、想像つかん、、」

また、今自分たちの通う尾鷲小学校が野戦病院と化していたことにも衝撃を受けていた。命を守るため、戦った兵隊を十分に弔うことができなかった現状に対して、

「戦争ってなんなんやろ、、なんで戦争するんやろ、、」

「今、自分たちが勉強したり、遊んだりってする生活は当たり前じゃないんやな」

そうした考えが子どもたちのなかに生まれてきた。そして、11月には秋の遠足を兼ねて、尾鷲市内でのフィールドワークをおこなった。白石墓地、天満の防空壕、そして、駒橋の船首に飾られていた「菊の御紋」が保管されている金剛寺を訪れた。白石墓地では戦死者のお墓に手を合わせ、墓誌を読んでわかることをまとめた。自分たちとあまりかわらない年齢で戦地に赴きなくなっている方、日本から離れた遠い場所で命を落とした方、兵隊だけでなく、看護師等の医療従事者が亡くなっていたことを知った。

「なくなるとる人、みんな若いな、、」

「まだやりたいことたくさんあったやろうなあ」

その後、天満の防空壕を訪れた。資料や動画では見ていたものの、実際の物を見るのははじめてという子どもたちばかりだった。

「入口せまいなあ」

「こんな中真っ暗やん、こわい」

「こんな中はずっとおって、それで銃撃とか爆弾の音とか一日中聞こえとったって考えられん」
そう言いながら、当時の生活の「当たり前」と自分たちの今の生活の「当たり前」を比べ、その差を実感した。

そうした思いを胸に金剛寺を訪れた。住職は駒橋奇襲攻撃の日の戦闘のようすや住民のようすを詳細に話をしてくれた。そして、なぜ人は戦争をするのか、わたしたちには何ができるのかを話してくれた。

「戦争はなくなれないかもしれないけど、なくなるようにしなければならない。そのためには戦争をなくそうとすることを、あきらめないことが大切だ」

そんな住職の話を聞き漏らすまいと、必死にメモをとるようす、ときにうなずきながら、静かに聴く姿は、「尾鷲にも戦争があった」という事実をしっかりと受け入れているようであった。子どもたちは住職の話から、戦争をなくすためにはあきらめないことが大切であるという考えを学ぶことができた。

生まれ育った尾鷲の町。何気なく歩いていた登下校の道が、学校で友だち勉強ができるという当たり前が、家に帰ればあたたかく出迎えてくれる家族がいる、そんな日常が、過去の多くの悲しい出来事のうえになりたっていることを知った子どもたちは、戦争はしてはいけないものという考えから一歩先にすすみ、どうすれば戦争をなくすことができるのか、命とは何なのか、わたしたちにできることは何なのかを考えるようになった。

5. 「未来」へつなぐため、「今・ここ」のわたしにできること

1年間の平和学習をどうすすめるかを考えていく際に、学んだことをどう表現させるかというところに力を入れた。「過去」の事実を学び、「未来」へとつなげていくために、「今・ここ」のわたしにできることを考え、行動することがこれからの「平和」な世界を創造していく子どもたちに必要だと思ったからである。

夏休み、運動会の表現運動を何にするか考えていた。やるならば、子どもたちが一生懸命とりにくんでいる平和教育と絡めたいと思った。考えた結果、エイサーに決定した。人が夢や未来に向かってすすむ力強さ、沖縄の自然の美しさや雄大さを表現する歌であった。子どもたちは一生懸命踊りをおぼえた。練習を重ねたこともあるが、何よりも、踊りの練習と同じくしておこなっていた沖縄戦や尾鷲の戦争の学習が子どもたちの「踊りを通して、見ている人に平和とはなにかを伝えたい」という力になっていった。「イーヤーサーサー」のかけ声に未来への希望を込めて、太鼓の音に平和への祈りをこめた踊りは、確かに見ている人たちの心に平和とは何かということを残すこととなった。

また、11月には作品展がおこなわれた。尾鷲小学校の6年生は例年かざり凧に加えて、平和学習で学んだことを一つ展示することになっている。子どもたちが全員で何か一つのものをつくれないかと思ったときに思い浮かんだのが修学旅行で訪れた立命館大学国際平和ミュージアムに飾られていた「過去の鳥」と「未来の鳥」だった。「過去の鳥」は銀色の羽で、戦禍による人類の苦しみや悲しみを語っている。「未来の鳥」は金色の羽で表されていた。平和への希望と実現を呼びかけているのである。

「過去」と「未来」をつなぐ子どもたちが学んだ「過去」の事実をまとめ、戦争がないという「未来」のために何ができるのか、「今・ここ」を生きている子どもたちが力をあわせてつくることに大きな意味があるのではないかと考えた。そこで、「過去の鳥」と「未来の鳥」をクラ

スごとに分かれて作成した。子どもたちは金と銀の折り紙を1枚1枚羽の形にかたどり、ていねいに切り取っていった。そして、その羽を1枚1枚、国際平和ミュージアムでみた景色を思い出し、平和への願いを込めて貼りつけていった。そして完成した2羽の鳥の周りに子どもたちの言葉を貼った。「過去の鳥」には、広島・長崎、沖縄戦、そして尾鷲の戦争で学んだことで忘れてはいけないと自分が思ったことを書いた。「未来の鳥」には、「今・ここ」の自分が考える平和とはなにか、そしてそのためにわたしにできることは何かを書いた。平和とは笑顔があふれることや生きることがうれしく思えることなど、調べ学習やフィールドワークなど、学んだことをもとに自分たちの言葉で書くことができた。子どもたちの考えのなかに、自身にとっての平和とはなにかが言語化されることとなった。そして、友だちの考えを読み、話をするなかで、考えを深めていくことができた。

12月、約半年間に及ぶ平和学習のまとめの作文をおこなった。再度一つひとつの事実を確認しながら、自分たちの戦争や平和に対する思いや考えを作文に書き起こした。平和学習をはじめたころの子どもたちは戦争はいけないこと、なくさなければならないという思いをもっていた。しかし、なぜかと言われたときに言葉にできなかった。半年間の学習に真剣にとりくんできたからこそ、子どもたちは自分の言葉で作文を書くことができた。そうして、作文を読んでいると、多くの子どもたちが「伝えていく必要がある」ということと「命の大切さ」という言葉を書いていた。この2つの点に重きを置いて、3学期の平和学習、そして小学校生活をまとめていきたいと思った。

1月末、6年生最後の授業参観があった。そこで、「平和学習発表会」をすることにした。グループを広島班・長崎班・沖縄班・尾鷲班に分け、今まで学んできた「過去」の事実から自分たちが学んだことや感じたこと、そして、そこから「今・ここ」に生きる自分たちが何を考え、行動していくことが大切か、何ができるのかを発表させた。発表はプレゼンテーション作成ソフトを活用した。発表で使う資料選びや効果的なアニメーションや提示方法、それに平行して発表原稿づくりなど、ほぼすべてを自分たちの力でおこなった。学んだことでもっとも伝えたいことは何か、それでほんとうに戦争の悲惨さを伝えることができるのか、そのための資料に何を使うのか、必死に話し合いをしながら、すすめる姿に頼もしさをおぼえた。そして、1年間の平和学習は、確かに子どもたちにとって、大切なものを残したのだと確信した。過去は変えられないけれど未来なら変えられる、生きてくても生きられない人たちがたくさんいるなど、自分たちの言葉で語ること、友だちの語ることを聞き、考えたこと、「今・ここ」を生きる子どもたちが「過去」を受けとめ、その事実を「未来」へつなぎ、ともにすすんでいこうとする姿や思いが確かにそこにあった。

6. おわりに

1年間の平和学習は、「今・ここ」を生きる子どもたちに戦争の醜さという「過去」を、そして戦争をなくし、平和な社会をつくるという「未来」を創造する力の第一歩を養うことができた。そして、「命」の尊さを最後に学んでほしいと思った。2月末、熊野市にある「極楽寺」というお寺を訪ねた。極楽寺は、およそ20年前に平和学習の一環としてつながった現尾鷲小学校の教頭の紹介だった。「木本事件」という朝鮮人虐殺によって命を落とした朝鮮人2人の墓石がおかれている場所である。

木本事件とは、1925年に熊野市木本町で「デマ」から生じた朝鮮人2人の差別をともなった

虐殺の行為である。まさに戦時中の人々の精神の不安定性、日本軍の情報操作、「命」に優劣をつけたわたしたちの先祖の起こした悲劇であった。極楽寺の住職は、木本事件の詳細を一言一言でいねいに、そして今なお残る差別性についても話をしてくれた。2人の若い命が奪われ、遺体を見せびらかすように寺に放置したこと、供養することすら許されなかったことを語ってくれた。

「木本の人たちは口をつぐみ、これらのことを話したがるらない、でもそれはちがう、知ることからはじめなければ何もできない」

と語る住職の力強い言葉に、子どもたちはメモをする手も止めて、必死に聴いていた。住職の力強さは行動にも表れていた。2人の墓をつくり、供養するときめるときも、周りの人々は「語る必要はない」「勝手なことをするな」と止め、ときには石を投げられたこともあったそうである。それでも、

「自分はまちがったことはしていない。2人の尊い命を供養したい。生きている間も死んだ後も差別されるのはおかしい。真実を隠して、それでいいのか」

と己が信じる道を突きすすんだのである。そして、話の最後にこう語ってくれた。

「心のなかには、誰にでもダメな心があると思う。その差別やいじめなどのダメな心、自分の弱さをまずは認めることが大切だ。今はつらいことがあってもちっぽけなこと、生きていたら道は開ける。今は一人だとしても、悪いこと、ダメなことをして友だちをつくるのではなく、自分がやりたいことをして、そのときできる仲間がほんとうの友だちだよ」

話の後、20年前と同じように、極楽寺の近くの海で石を拾った。そして、石には今日の話を聞いて、そして、これまでの平和学習から学んだことをもとに、学んできた「過去」をつなぐためにと『未来』、命はたった一つしかないからと『尊い命』、人が人に向き合う大切さのために『向きあう』など子どもたちの「言葉」を文字として刻んだ。その石をお墓にそなえ、平和への祈りをささげた。

20年の時を経て、戦争という「過去」が、平和とは何かを学んだという「過去」が、「今・ここ」に生きる子どもたちにつながり、そして、その子どもたちが自分事として命の尊さを、戦争の愚かさを「未来」へとつなぐ、人と人との出会いがまた、新たな学びの場を形成することとなったのだ。

学習のふりかえりとして、再び「平和」とはなにかと問いかけた。学びはじめたころの子どもたちは「戦争がないこと」と答えていた。この1年、多くの「過去」の事実を知ることからはじめた。当時の人々の思いに「共感」し、戦争とは、平和とはという自分の考えを深め、ポスターや発表会などで表現・発信し行動に移した。そうすることで子どもたちは最後、「平和」とはなにかという問いに、「一人ひとりの命が大切にされること」「明日がくることを楽しみと思えること」「誰かの自由を奪うことなく、一人ひとりがやりたいことができること」と具体的なイメージをもって自分の言葉で語ることができた。

6年生を送る会では、「平和の鐘」を6年生全員で歌った。2学期から練習をはじめていたが、フィールドワーク、発表会、出会い学習、多くの事を経験するたびに、歌は子どもたちの思いがよりつまったものとなっていた。当日披露した歌は、聞くすべての人に、1年間の平和学習で考えた思いを届けることができたのだろうと感じた。

戦争は決して「過去」の遺物ではない。今もなお、世界のどこかで、戦争がおこなわれている。教え子を再び戦場に送るな、そのためには、「過去」の事実とむきあい、「未来」でいつか

きっと戦争をなくすのだと、あきらめることなく、「今・ここ」に生きるわたしたちが精一杯のことをやりつづけることが大切なのである。最後に子どもたちにこの言葉を送り、平和学習を終えた。

「みんなが何気なく、当たり前で生きてきた「今日」は、誰かにとっての生きてなかった「明日」なのかもしれない。人の命を奪う戦争、それは誰かと生きて、楽しいこと、つらいこと、頑張ったこと、そうした心を満たすものを奪う行為だ。心にできた空白を埋めるのはむずかしい。だから、自分のために、みんなのことを思ってくれる大切な人のために、そしてこれから出会っていくであろう、たくさんの人のために毎日をしっかりと生きてほしい」

平和教育とは、戦争の悲惨さや残酷さを学ばせることだけでなく、そこに広がっていた人と人とのつながりや、命のつながり、尊さを学ぶことなのではないかとあらためて自分の考えも見直すことができた。今後の課題として、本実践でおこなった平和学習はあくまでもスタート地点であり、こうして考えたことや表現・発信したことをどう子どもたちが主体的に継続していくか、そのための平和教育の実践方法や考え方などに今後もとりにくんでいきたい。

主要参考文献

「終わらない戦争 沖縄が問うこの国のかたち」、株式会社ウェッジ、2025

「今と過去をつなぐ平和教育」、(株)労働教育センター、労働教育センター編集部(編)、2023

「学校で戦争を教えるということー社会科教育は何をすべきか」

角田将士、学事出版株式会社、2023

「関東大震災 朝鮮人虐殺を読むー流言蜚語 [フェイク] が現実を覆うとき」

劉永昇、亜紀書房、2023